

## 2-3. 小見川の町並みと祇園祭に見る歴史的風致

### (1) はじめに

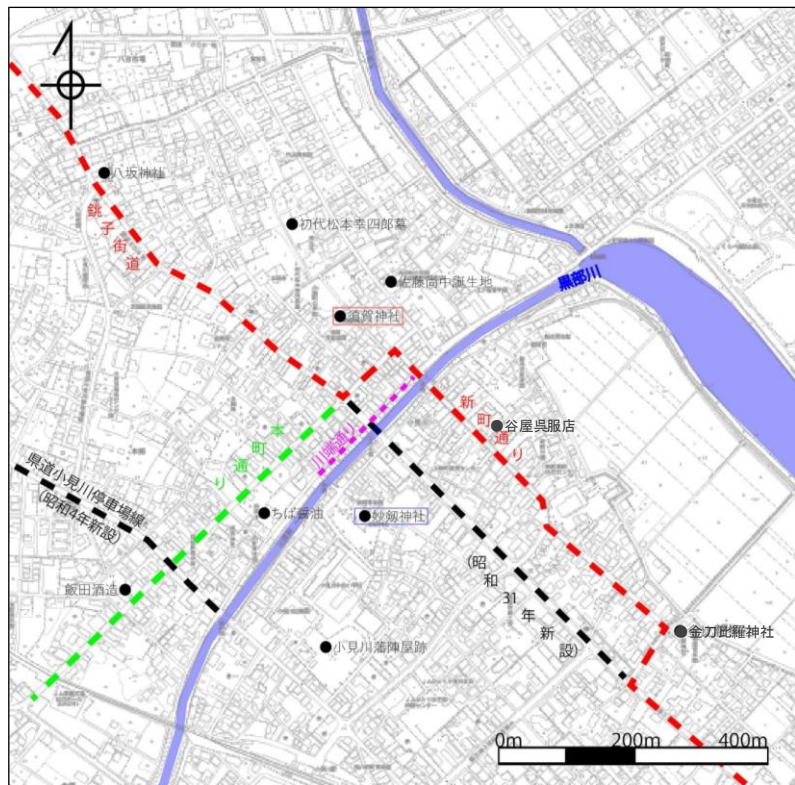
小見川は市の東部、利根川の南岸に位置しており、中央付近を利根川支流の黒部川が南北に貫流している。地形的には下流域の平坦地で、その河口付近はかつて「八丁面」と呼ばれる遊水地であり、市街地周辺には水田域が広がっている。この黒部川沿いに形成された町並みが、合併前の旧小見川町の中心市街地であった。江戸時代には小見川河岸として発達し、幾人かの領主の交代を経て、寛永16年(1639)に内田氏の領地となってからは、陣屋も置かれた。

小見川は、黒部川両岸の通りや、黒部川の西側に並行して走る通称「本町通り」・「川端通り」と、銚子街道の一部である「新町通り」を中心に町並みが形成されてきた。現在も、呉服商などの店舗や、酒造蔵などが営業を続けている。

そして、この小見川の町並みでは、黒部川西岸側の鎮守であるすが須賀神社の祇園祭が、毎年7月中旬頃に行われる。初日の神輿渡御に加えて、氏子6町内の屋台が翌日から2日間曳き廻される。併せて八坂神社と金比羅神社の神輿も繰り出されるなど、3日間にわたって小見川の町は賑わいを見せる。



小見川市街地遠望



小見川市街地の道路図

## (2) 小見川の町並みの成り立ち

### ①領主の変遷と小見川陣屋

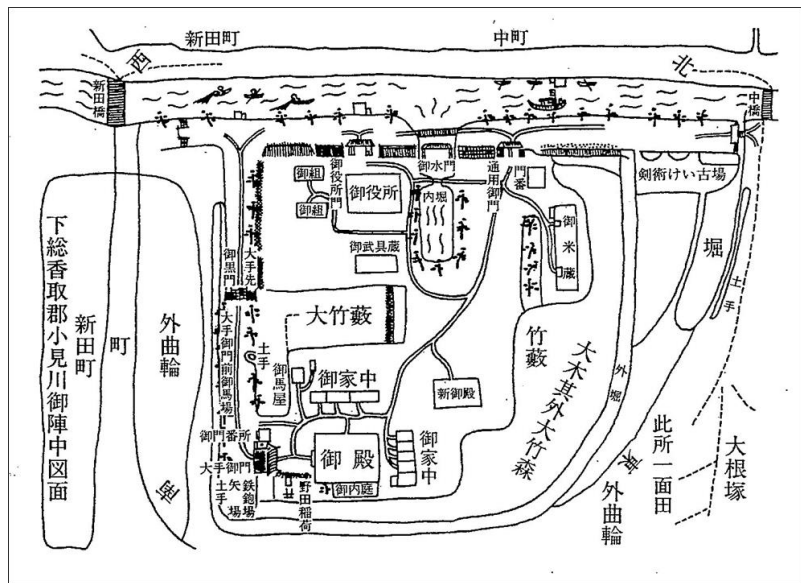
小見川は、『和名類聚抄』(承平年間(931~938)に成立)に記されている海上郡麻統郷並びに城上郷の遺称地と推定されている。戦国時代には千葉氏一族の栗飯原氏が、当地の西側の高台である城山にあった小見川城を居城として、この地域を支配していた。

徳川家康の関東入国以後の小見川は、文禄3年(1594)に松平家忠が香取郡上代郷(現香取郡東庄町)から移封されると、その後、慶長7年(1602)からは、土井利勝、安藤重信、佐倉藩(土井利勝)、三浦正次、代官支配地となるなど、比較的短期間にその支配が交代している。

寛永16年(1639)11月から内田正信が領主となり、小見川は内田氏の所領となるが、当初内田氏は下野国鹿沼を居所としていた。その後、享保9年(1724)に3代目の内田正偏に代わって、嫡子の正親が小見川周辺8,000石など、合わせて1万石を与えられ、小見川を居所と定めた。

なお、これより前の貞享5年(1688)にはすでに内田氏は小見川に陣屋を構えていたが、4代目の正親以降はここを藩庁として、小見川藩が幕末まで続いた。

陣屋地図(協家文書)によれば、画面上部の黒部川の東側、中橋(現仲橋)と新田橋の間に陣屋が構えられ



陣屋地図(協家文書『小見川町史 史料集(第1集)』より)

ていて、御殿や大手門、御役所などが配置され、また黒部川に通じる内堀には水門が設けられている。陣屋の場所は「館ノ内」と呼ばれ、現在その跡地の大部分が市立小見川中央小学校の敷地となっている。

江戸時代の小見川村の規模は、元禄13年(1700)頃の村高は300石余であるが(『下総国各村級分』)、天保期(1830~1844)には1,089石余(『天保郷帳』)

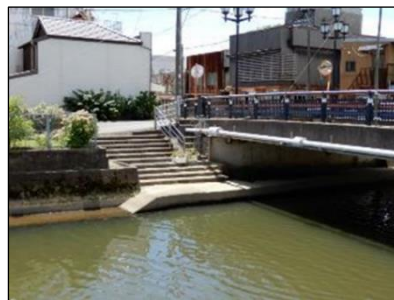
となる。これは周辺の新々田村などの新田開発分を含むと考えられ、幕末期には1,168石余となっている（『旧高旧領取調帳』）。享保15年（1730）3月の家数等の改めによれば、惣町家数539軒で、長さ12間、幅1丈2尺の大橋のほか、中橋、新田橋があった（「小見川領内諸事覚書」木内神社文書）。

明治以降は、明治8年（1875）に千葉県に属し、明治22年（1889）には周辺8ヶ村と合併し小見川町となる。明治24年（1891）の戸数は866戸、人口は5,370人であった。

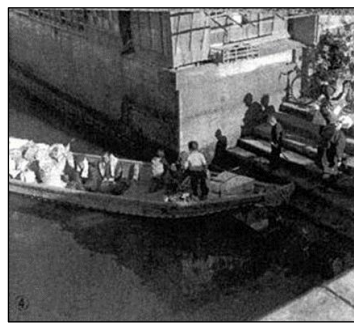
江戸時代の歌舞伎役者、初代松本幸四郎や、東京順天堂医院（後の順天堂大学）の創始者である佐藤尚中（山口舜海）は小見川の出身であり、善光寺境内に初代松本幸四郎の墓、その近くに佐藤尚中の生家の屋敷跡（現内浜公園）が残されている（いずれも県指定史跡）。

## ②小見川河岸と「ダシ」

小見川は、応安7年（1374）の「海夫注文」（香取文書）に、「さわらの津」「津のみやの津」と並んで「おみかわの津」と見えることから、当時利根川下流域に広がっていた「香取の海」に臨む港津集落の一つであった。その後、江戸時代の早い時期から小見川は舟運の拠点としており、松平家忠が著した『家忠日記』には、天正20年（1592）2月19日～22日の条によると、家忠は武蔵国忍（現埼玉県行田市）から船で小見川に到着している。また同年8月19日の条には「江戸兵糧舟小見川より昨日出し候」と見えるように、江戸との船での結びつきが見える。享保5年（1720）の川船奉行により船改めでは小見川船数は49艘で、内訳は高瀬船21艘、艀船13艘、猪牙船15艘となっていて、村高のうち船高50石が含まれ年貢を納めてきた。同じく元文4年（1739）の改めでも、小見川船数は49艘を数えたが、内訳は高瀬舟23艘、艀船14艘、猪牙船12艘とやや増減が見られる（「小見川領内諸事覚書」木内神社文書）。



大橋のたもとのダシ



ダシから乗船  
（大橋東岸、昭和37年）



黒部川沿いには船着き場である「ダシ」が設けられていた。その正確な位置や数は詳らかではないが、小さなものでは木製のダシなども設けられていた。近年は船の利用がほとんどなくなっているため、船着き場として活用はされていないが、コンクリート製のダシは今でも3ヶ所残されている。黒部川に古くから架けられていた橋は、下流から大橋、中橋（現仲橋）、新田橋と続くが、現在も大橋のたもと東岸に「新町の大ダシ」が、仲橋と新田橋の間、東岸に「石塚瓦のダシ」が、そして新田橋たもと西岸に「土佐治のダシ」の3つが確認できる。近年までは「石塚瓦のダシ」の対岸には、ちば醤油のダシも設けられていた。

### ③小見川の町並みと今も残る商家

小見川は、江戸初期からの小見川河岸の発展と相まって、黒部川沿いとそれに並行し走る本町通りや川端通り、銚子街道の一部である新町通りを中心として町並みが形成されてきた。一方で、貞享5年（1688）に内田氏が陣屋を構えたことから、仲橋と新田橋の間の黒部川東岸の区域は、町並み形成からは除かれている。

河岸の発展により、黒部川沿いや河口付近には、河岸に出入りする船からの荷物を取り扱うために回漕問屋が居を構え、幕末近くになると高橋庄兵衛、釘屋忠兵衛、岡野兵五郎、土佐屋治兵衛といった名前が見える。荷物の積み下ろしのためのダシも設けられ、そのうちの幾つかが今も残るが、大橋たもとのダシの近くには釘屋が、新田橋たもとには土佐屋があったとされる。

定期市も開かれており、佐原の三、八の日に



石塚瓦のダシ



新田橋から黒部川下流方向  
を見る、左脇はダシ

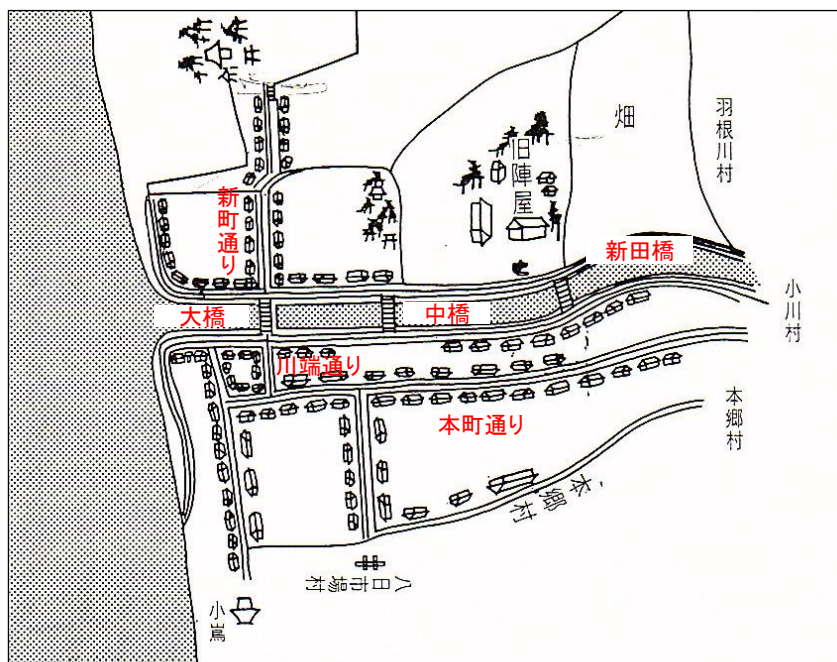


本町通り  
(大正4年『小見川案内』より)



新町通り  
(大正4年『小見川案内』より)

対して、小見川は二、七の日が六斎市の市日であった（「小見川領内諸事覚書」木内神社文書）。小見川は、銚子街道沿いの宿場町であったことから、商家や旅籠などが立ち並んでいたといわれる。大橋脇には油屋旅館、その対岸の河口寄りには林屋旅館といった旅館があった。醸造業も発達し、慶応4年（1868）には、醤油醸造人4人、酒造人4人、濁酒造5人、生産高は醤油1,050石、酒943石、濁酒186石であったとの記録もある（東庄町多田家文書）。



明治初期頃の小見川村絵図

（徳星寺文書『小見川町史 史料集（第4集）』より）

残念ながら、小見川の町並みは、明治13年（1880）、明治20年（1887）、明治21年（1888）と立て続けに大火に遭っている。明治13年12月25日の新田の大火では156軒が焼失、小学校校舎や仲町の大村屋商店（後のちば醤油）の隣りにあった妙隆寺題目堂なども類焼、明治20年2月24日の火事は、北下宿で出火し、北下宿、南下宿、新町、川端、本町など130余戸が焼失、翌21年1月16日の火事では、小路旅人宿より出火し、本町、小路、川端で120余戸が焼失した。これにより多くの商家も焼失したと言われているが、現在も、新町通りの谷屋呉服店などいくつかの商家などが残っており、江戸時代末期の創業であるが、ちば醤油や飯田本店などの醸造業者が今も営業を続けている。

### (3) 小見川の町並みと祇園祭に関連する建造物

#### ① 祭礼に関連する建造物

##### ◆ 須賀神社

年代：大正3年（1914）

規模・特徴：本殿（神明造、瓦葺、0.75坪）、拝殿（切妻造平入、銅板葺、10坪）、神楽殿（6坪）

祭神は素戔嗚命<sup>すさのおのみこと</sup>。黒部川西岸6町の鎮守で、小路町内<sup>しょうじ</sup>に鎮座する。社伝によれば、千葉氏一族の栗飯原氏<sup>あいはら</sup>の創建により祈願所となる。寛永17年（1640）領主の内田信濃守正信<sup>しなののかみまさのぶ</sup>が社殿を建立、大正3年（1914）に社殿を新築した。4月3日の春季大祭と7月中旬の夏季大祭（祇園祭）が行われる。春季大祭では木内神楽<sup>きのうち</sup>が奉納される。夏季大祭（祇園祭）は3日間かけて行われ、初日には御浜降りの神事を行い、神輿が町内を渡御する。



須賀神社



須賀神社

（大正4年『小見川案内』より）

##### ◆ 妙劔神社

年代：元和8年（1622）

規模・特徴等：本殿（流造、銅板葺、0.83坪）

祭神は日本武尊<sup>やまとたけるのみこと</sup>。黒部川東岸4町の鎮守で、南八軒町<sup>みなみはちけんちょう</sup>に鎮座する。社伝によれば、元和8年（1622）4月に鎮守として建立、その後内田氏が寛永16年（1639）に領主となると、代々の氏神として祭事が行われ、社殿の営繕が行われてきた。現社殿は、平成3年（1991）10月22日に拝殿が新築され、本殿の屋根葺替え、一部修理が行われている。

境内には、大正15年（昭和元年・1926）建立の鳥居や、昭和15年（1940）皇紀2600年記念の狛犬が奉納されている。祭礼日は10月9日で、かつては、須賀神社の祇園祭と同様、明治中頃から



妙劔神社



妙劔神社

（大正4年『小見川案内』より）



大正7年（1918）頃までは屋台の曳き廻しを伴うような祭礼が行われていた。



大正15年建立の鳥居



昭和15年奉納の狛犬

### ◆八坂神社

年代：寛永18年（1641）

規模・特徴等：本殿（流造、銅板葺、0.275坪）、拝殿（瓦型銅板葺、6坪）

祭神は素戔鳴尊<sup>すさのおのみこと</sup>。寛永18年（1641）8月14日勧請、建立された。八日市場村の鎮守で、本殿は昭和30年（1955）に改築されている。7月中旬の須賀神社祇園祭に合わせて祭礼が行われ、神輿渡御が行われる。なお、現在の神輿は2代目のもので、墨書から大正13年（1924）の製作である。なお、拝殿屋根は昭和60年（1985）頃に瓦葺から<sup>さんがわら</sup>棧瓦型の銅板葺に葺替られた。



八坂神社



八坂神社正殿改築（昭和30年）

### ◆金刀比羅神社

年代：明治42年（1909）

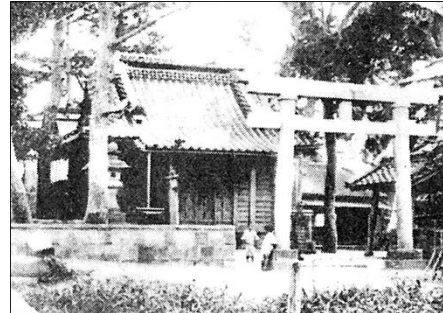
規模・特徴等：本殿（神明造、銅板葺、1.17坪）、拝殿（入母屋造平入、瓦葺、6坪）

祭神は崇徳天皇、素戔鳴命<sup>すどく</sup>。大根塚<sup>おおねづか</sup>の鎮守で、7月中旬の須賀神社祇園祭に合わせて祭礼が行われ、神輿渡御が行われる。社伝によれば、文化2年（1805）8月9日に讃岐国<sup>さぬき</sup>金刀比羅大権現を勧請し、創建したと言われる。明治41年（1908）

11月 に同所にあった須賀神社を合祀している。平成8年(1996)に社殿改修中に、社殿を新築した際の棟札など5枚の棟札が確認されている。



金刀比羅神社



金刀比羅神社

(大正4年『小見川案内』より)

## ②小見川の町並みの風情を残す建物

### ◆飯田本家(酒造業)

創業は明治10年(1877)で、以前は米問屋を営んでいた。かつては、多くの酒蔵があったが、現在は小見川では飯田本家を残すのみとなった。大正4年(1915)の『小見川案内』掲載広告を見ると、以前は醸造元「飯田惣兵衛」や、商標の※印から「米惣」などとも称していた。代表的な銘柄に「大姫」、<sup>おおひめ</sup>「惣兵衛」がある。大姫は、市内鎮守に合祀されていた大宮神社と姫宮神社の頭文字をいただいたもの。また惣兵衛は、二代目当主(明治5年～昭和19年)にちなんで名づけられたものである。



飯田本店 店舗



飯田本店店舗

(大正4年『小見川案内』より)

現在は、専任の杜氏を置かず、当主自ら酒造りに取り組んでいて、近年はリキュールのかぼす酒やワイン作りも手掛けている。

飯田本家のある界限(新田・田町)は明治13年(1880)に大火があった。現在の店舗がその影響を受けたかどうかは不明であるが、廊下の床下収納の板に



は「明治廿七年六月作之」との墨書があるため、明治 27 年（1894）以前に建てられたものと思われる。大正 8 年（1919）頃に西南に 2 km ほど離れた丘陵の中腹から、酒造りに必要な水を確保するための水管埋設工事を行い、酒蔵の水槽も設置している。

下屋<sup>げやひさし</sup>庇には、新酒が出来た際に周囲に知らせるための杉玉（酒林）が吊り下げられている。50 cm ほどの丸い球は、手で触れることができるほどの高さに吊るされており、通りに面して酒蔵らしい雰囲気醸しだしている。また敷地内には醸造蔵や煙突、立ちの高い倉庫などが見られる。



廊下床下の墨書



大正 8 年の刻銘のある水槽



下屋庇に吊るされた杉玉

#### ◆ちば醤油旧本社

ちば醤油の前身は、大村屋商店と飯田本店で、昭和 39 年（1964）に両社が合併して株式会社ちば醤油が設立された。商標は「イリダイ」醤油。大村屋商店は、嘉永 7 年（1854）に肥前大村藩より融資を受け、当地で創業し、飯田本店は、元治元年（1864）に旭（現・匝瑳市）において飯田佐治兵衛商店として創業している。もともと小見川の黒部川沿いに本社工場はあったが、船による荷の積み下ろしもあるためか、正面入口が黒部川に向けて造られている。ちば醤油の工場は、昭和 46 年（1971）に市内の小見川工業団地内に新工場を建設、稼働している。旧本社工場跡には、明治 14 年（1881）建築の店舗と、これに隣接する醤油蔵



ちば醤油・旧本社店舗

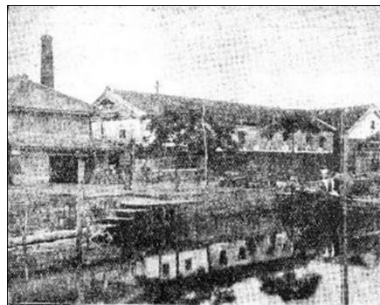


ちば醤油旧本社（昭和 38 年）

が残されている。また、敷地周囲には耐火対策用に設けられたとされる煉瓦塀の一部も残されている。なお、店舗、醤油蔵は、現在は地元ロータリークラブが管理している。昭和41年（1966）の写真などを見ると、かつては、店舗前に専用のダシを設け、敷地内に大きな蔵などが連なっていたことがわかる。



ちば醤油・旧本社煉瓦塀



ちば醤油

（大正4年『小見川案内』より）



ちば醤油・黒部川沿い  
（昭和41年）

#### ◆<sup>たにや</sup>谷屋呉服店<国の登録有形文化財>

谷屋は、旧銚子街道沿いに位置する呉服商で、嘉永元年（1848）に創業した。土蔵は明治初期の建築で、切妻造平入、瓦葺2階建てで、白漆喰塗り、店舗側の東面に入りを設ける。現在も店舗では呉服店を営業しているが、土蔵は夢紫美術館<sup>ゆめむらさき</sup>として、当主が復活させたアカニシ貝による貝紫染色の技法や作品の展示をしている。



谷屋呉服店



谷屋呉服店

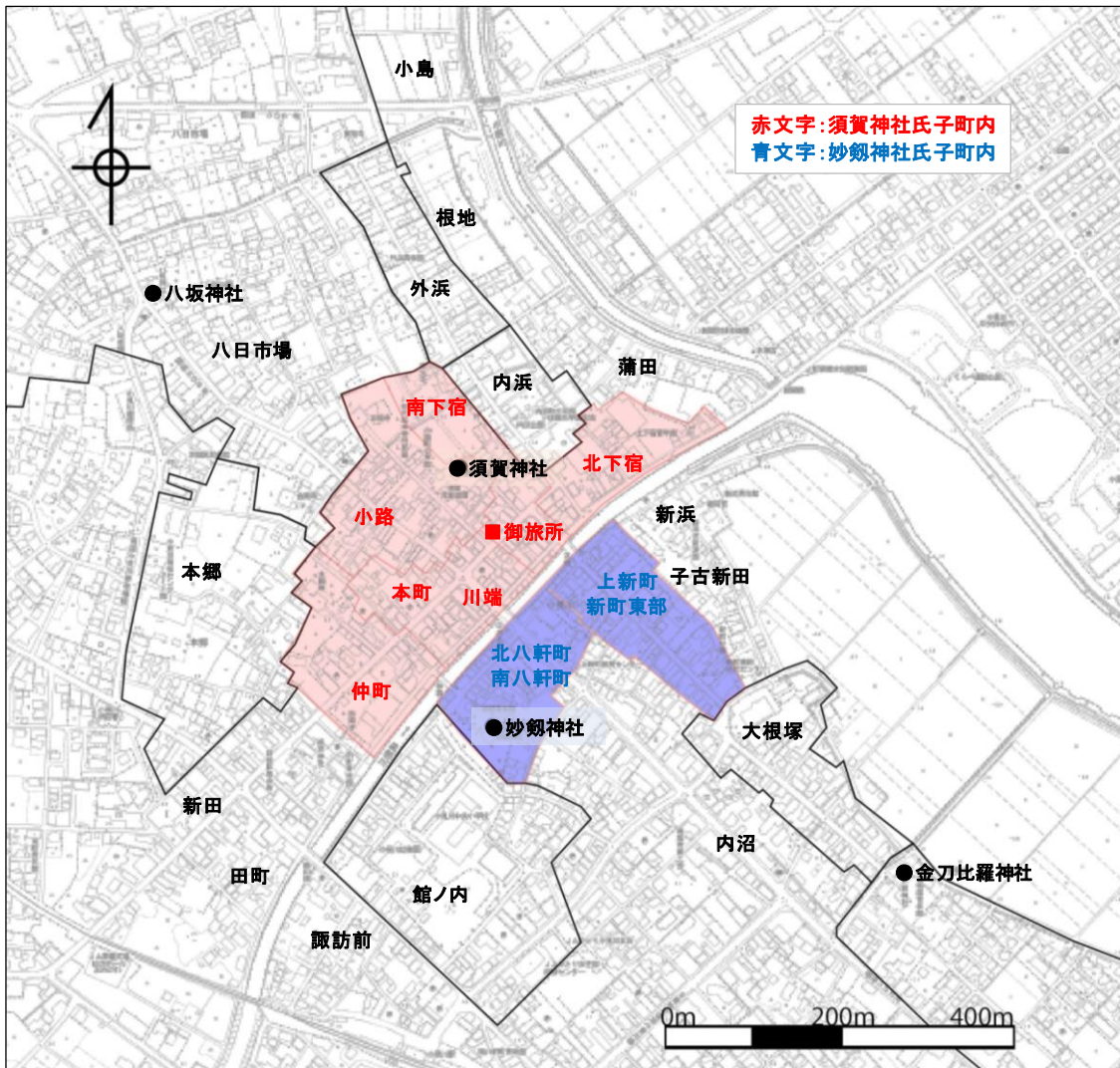
（昭和4年『北総写真名鑑』より）



#### (4) 小見川の祇園祭

小見川の祇園祭は、7月中旬頃に行われる鎮守の須賀神社の例祭である。寛永16年（1639）より始められたと言われる。

神事である神輿渡御、神幸に合わせて、氏子町内の屋台の曳き廻しが特徴である。屋台は全部で6台、それぞれ彫り物や色彩があでやかで、江戸文化の粋が随所に取り入れられている



小見川祇園祭 祭礼町内区割図



## ① 祇園祭の由緒

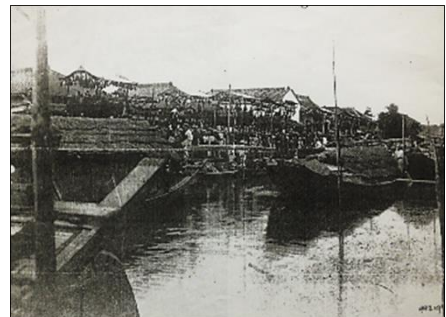
小見川では、かつては祇園祭（旧暦6月15日）、<sup>みょうけん</sup> 妙劔祭礼（旧暦9月9日）と二つの祭礼が行われていた（「小見川領内諸事覚書」木内神社文書）。祇園祭は現在と同じく黒部川西岸6町内（<sup>なかまち</sup> 仲町、<sup>ほんまち</sup> 本町、<sup>しょうじまち</sup> 小路町、<sup>みなみしもじゅくまち</sup> 南下宿町、<sup>きたしもじゅくまち</sup> 北下宿町、<sup>かわぼたまち</sup> 川端町）、妙劔祭礼は東岸の4町内（<sup>きたはちけんちよう</sup> 北八軒町、<sup>みなみはちけんちよう</sup> 南八軒町、<sup>かみしんまち</sup> 上新町、<sup>しんまち</sup> 新町<sup>とうぶ</sup> 東部）で行われていたようである。現在は、屋台の曳き廻しを伴うような盛大な祭礼は祇園祭のみで、妙劔神社では、明治中頃から大正7年（1918）頃までは屋台が曳き廻されていたようであるが、現在は行われていない。

「須賀神社記録」にある明治44年（1911）作成の「無格社 須賀神社由緒」によれば、須賀神社は元々千葉氏一族である栗飯原氏の創建で、素戔男命を祭神として祀る。その後、歴代の領主が尊崇するところであったが、寛永16年（1639）に内田正信が領主となると、その信奉は特に篤く、翌年17年（1640）に社殿を造営し、かつ金穀を出して祭費を助けた。祇園祭に対しては特に敬い重んじ、役人を派して祭祀に臨ませ、祭式が終わると直ちに馬で江戸の上屋敷に報告させていた。祭日は春・夏の二季で、そのうち夏季は陰暦6月15日をもって大祭とし、その祭式はもっぱら尾張津島神社（現愛知県津島市）によった、としている。また、当時の祭礼の様子として、古例により各町の区長総代を先駆けとし崇敬者数百、礼服を着て警護し、仮装の殿様及び武士若干名が付きしたがって神輿の渡御があり、その儀式は神聖にして、すこぶる荘厳を極め、いわゆる小見川祇園と称する、とも記している。なお、仮装の殿様、武士は昭和38年（1963）までは続けられていた。



祇園祭・本町通り  
（大正4年『小見川案内』より）

現在の祇園祭では氏子町内によって各々屋台が曳き廻されるが、この屋台がいつ頃登場したかは不明である。前出の「須賀神社記録」には、屋台の記述は見当たらず、明治8年（1875）の神輿御神幸に際しては、6ヶ町の頭殿が一同並び、傘鉾を持ち来たりて本社前に詰める、と記されている。なお、他の記録では南下宿が明治25年（1892）に屋台を新造することになり（明



祇園祭・北下宿地先  
（明治45年7月15日）

治 25 年 9 月「屋台新築費用控 南下宿」)、これまでの屋台は北下宿のものとなったことから、少なくともこれ以前には屋台は曳き廻されていたと思われる。また、明治 45 年 (1912)、大正 4 年 (1915) の写真などにも屋台が曳き廻される様子が見える。

## ②小見川の屋台

小見川の祇園祭では 6 町内 (仲町、本町、小路町、南下宿町、北下宿町、川端町) の屋台が曳き廻される。屋台は二層式の構造となっている。1 階ははやしかた囃子方が乗り込み、2 階は演芸場となり、上部に屋根が付いている。周囲には彫り物が施され、多数の提灯が下げられている。囃子方には、きよみず清水、うちの内野、きのうち木内、の野田、しもおがわ下小川、はねがわ羽根川といった小見川周辺地区のげざ芸座連が乗り込んでいる。屋台は芸座連の演奏により曳き廻され、停止時には上部の屋根を引き上げて、2 階の演舞場で歌謡などが披露される。



川端町



本町



仲町



小路町



南下宿町



北下宿町





2階が舞台となる



屋台の彫り物（小路・中心蔵）

### ③祭礼の流れ

現在の小見川の祇園祭は、7月中旬の金曜日から日曜日の3日間行われている。初日は須賀神社からの神輿渡御とぎよが行われる。屋台の曳き廻しは2日目、3日目で、曳き廻しの範囲は須賀神社氏子町内のみならず、妙劔神社氏子町内及び周辺も広く含まれる。特にちば醤油や飯田本家のある本町通りや谷屋呉服店のある新町通りなどは町並みの風情とともに、曳き廻しにより大いに賑わう場所である。2日目の夕刻には八坂神社、金刀比羅神社の神輿も中央大橋で合流し、祇園祭を盛り上げている。平成30年度は7月20日から22日の3日間行われた。

#### 1日目 7月20日（金）

午前8時に須賀神社境内にて祭典が行われた後、午前9時に神輿渡御が始まる。神輿はまず大橋脇に向かい、水辺での神事である御浜降りが行われる。その後、氏子町内を順々に廻り、12時頃に本町の交差点付近に設けられた御仮屋おかりやに神輿は安置される。



神輿渡御



神輿渡御



御浜降り



御仮屋



## 2日目 7月21日(土)

午前9時から、6町による屋台曳き廻しが行われる。曳き廻す範囲、順序は各町内で異なるが、自町内を中心にそれぞれ6町内で曳き廻される。

この日は、八日市場の八坂神社、大根塚の金刀比羅神社の両社から神輿が繰り出される、午後7時過ぎに中央大橋上で、2基の神輿が合流し、祇園祭を盛り上げる。ちなみに、八坂神社は須賀神社と同じ素戔嗚命を祭神とし、金刀比羅神社も明治41年(1908)に須賀神社(祭神素戔嗚命)を合祀しており、同じ小見川地区として三社合同で祇園祭を行うようになった。なお、現在の八坂神社の神輿渡御は昭和48年(1973)に再興されたものであり、少なくとも祇園祭に中央大橋まで神輿を繰り出すようになったのは、それ以降のこととなる。

夜には黒部川で雪洞によるイルミネーションの点灯が行われ、翌3日目まで水面に映える光の幻想的な雰囲気を楽しむことができる。

このほか、おまつり広場前などでは、屋台の「のの字廻し」や手踊りの披露なども行われる。



大根塚・八日市場の神輿  
(中央大橋)



雪洞のイルミネーション



八日市場の神輿



大根塚の神輿

## 3日目 7月22日(日)

最終日も午前9時から6町による屋台曳き廻しが行われる。夜には祭礼の最終盤を迎え、午後7時頃から芸座による通し砂切りさんぎが演奏され、その後、屋台曳きわかれ、「のの字廻し」と続き、午後10時には祭礼は終了する。

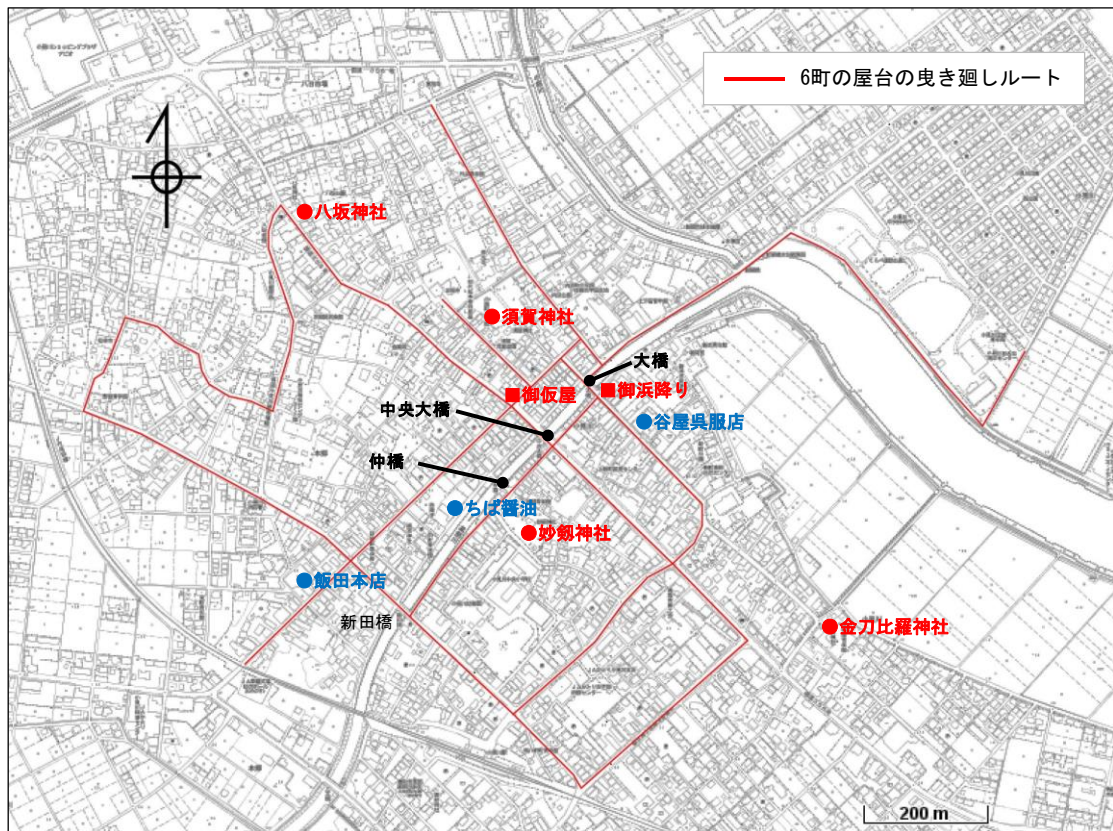
なお、須賀神社の神輿は、午前7時30分に祭典が行われ、その後、御仮屋を出発して、午前8時30分頃には須賀神社本殿へ還御する。



本町通りを行く屋台



新町通り・谷屋呉服店前の屋台



屋台の曳き廻しルート

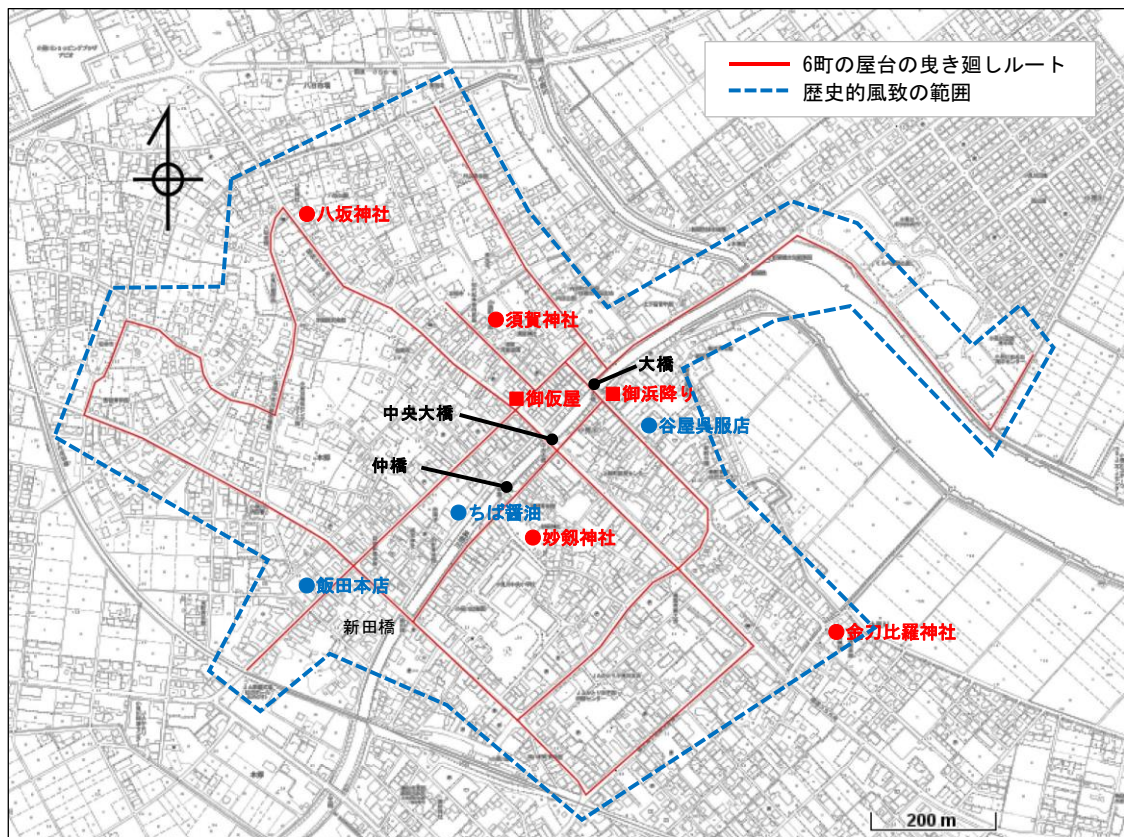


### (5) まとめ

小見川は、利根川舟運の一拠点である小見川河岸として発達してきたことは、町の発展の主要因となっていた。江戸時代に内田氏の陣屋が設けられたこともあり、陣屋があった黒部川東岸よりも、西岸を中心に商家が立ち並んでいる。また東西に走る銚子街道も直行せず、<sup>かぎ</sup>鉤の手になっている。

小見川の町並みは、黒部川沿いの「川端通り」や、黒部川の西側に並行して走る通称「<sup>ほんまち</sup>本町通り」と、銚子街道の一部である「<sup>しんまち</sup>新町通り」を中心に形成され、現在も、谷屋呉服店などの店舗や、ちば醤油や飯田本家などの醸造蔵などが残り、その風情を残している。

黒部川西岸にある須賀神社で、毎年7月中旬頃に3日間行われる祇園祭は、この小見川の町並みで、神輿渡御とともに屋台が曳き廻される祭礼である。黒部川西岸の氏子6町内の祭礼ではあるが、その範囲は東岸の妙劔神社氏子町内も含む広い範囲に及んでいて、江戸時代からの祭礼の様相を今に伝える年に一度の盛大な祭りである。氏子により曳き廻される屋台を見物しようと集まった人々で小見川の町は大いに賑わい、黒部川や古くからの町並みと相まって、良好な歴史的な風致を形成している。



小見川の町並みと祇園祭に見る歴史的風致の範囲



